

パン・ヨーロッパとファシズム ——クーデンホーフ＝カレルギーとヨーロッパの境界

福田 宏

はじめに

リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー (Richard Coudenhove-Kalergi, 1894-1972) の名は日本でも比較よく知られている。彼は戦間期にパン・ヨーロッパ運動を起こし、指導的な役割を果たしたことから、現在のヨーロッパ統合の先駆けになったともいわれている。日本では、一九七〇年代初頭に全九巻に及ぶ全集も出版され、著作の多くを日本語で読むことができる。

彼の名を日本で有名にしている最大の理由は、母親が日ある。一九二〇年代におけるクーデンホーフの活躍は華々しいものであった。二九歳(一九二三年)のときに発表した著作『パン・ヨーロッパ』は一躍ベストセラーとなり、依然として戦後の混乱が続くヨーロッパにおいて大いに注目された。二六年にはウィーンで一回目となるパン・ヨーロッパ会議を開催し、政財界の要人や知識人を中心に、二四カ国から二千人以上の参加者を集めている。そして、クーデンホーフの良き理解者であり、パン・ヨーロッパ同盟の名誉会長でもあったフランスのブリアン首相が、二九年の国際連盟総会において「ヨーロッパ連邦的な秩序」の樹立を提案し、翌三〇年にはそれを具体化したいわゆるブリアン



写真1 リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー(1920年代前半)

(出所)『クーデンホーフ全集』第1巻、扉。

本人であることだろう。クーデンホーフ光子(二八七四―一九四一)こと青山みつは、東京で骨董品屋を営む商人の娘であった。彼女は、駐日代理公使であったハプスブルク君主国(オーストリア＝ハンガリー二重君主国)の貴族ハインリヒ・クーデンホーフ＝カレルギー(一八五九―一九〇六)と結婚し、現在のチェコに位置するロンズベルク(チェコ語名:ポビェジヨヴィツェ)へと赴いた。夫のハインリヒが急逝し、先方の親族から帰国を薦められたにもかかわらず、光子は領地の運営を自ら取り切り、七人の子どもを育て上げた。その波乱に満ちた人生については、日本において多くの本が書かれている^{*}。本稿において取り上げるリヒャルト(以下、クーデンホーフ)は、その次男で

覚書を作成した(遠藤二〇〇八:二〇四―二一三)。クーデンホーフは政治家でも企業家でもなかったが、一人として一種の「ヨーロッパ合衆国」構想を提示し、それを具体的な政治交渉の場に持ち込むことに成功したのである。少なくともその点において、ヨーロッパ統合史における彼の功績は大きいといえよう。

だが、一般的なヨーロッパ統合の通史においては、彼の名は先駆者の一人として必ず言及されるものの(例えば、ヒーター一九九四:一八六―一九四)、その実像が十分に知られているとは言いがたい。その最大の理由は、彼が第二次世界大戦後の統合運動において主導権を握れず、周辺的な存在に陥ってしまった点にある。また、彼はナチズムに対して明確に反対していたものの、一九三〇年代にオーストリアのファシズム政権と協力関係を持ち、イタリアのムッソリーニに接近したという過去を有している。この点も、彼に対する再評価が進みにくい理由の一つであろう。「EUの礎を築いた男」としてクーデンホーフの伝記を書いた林も、彼がなぜムッソリーニに近づいたのか理解に苦しむと述べ、こうした行動を例外的エピソードとして扱っている(林二〇〇九:二八五―二八七)。

本稿が着目するのは、まさにこの「例外的エピソード」

の部分である。もちろん、クーデンホーフの汚点を暴き出し、彼に対する個人攻撃を行うといったことは本稿の目的ではない。ここで重要なことは、彼がファシズムに親近感を抱いた背景に注意を払うことである。そのためには、彼がどのような価値観や世界観を持ち（第I章）、どのような枠組でヨーロッパという単位を捉えようとしていたのか（第II章）、そして、何のためにファシズムに接近し（第III章）、その行動をどのように説明したのか（第IV章）、といった点を考える必要がある。本稿においては、ツイーガー・ホーファー（Ziegerhofer 2004）、コンツェ（Conze 2004）、戸澤（二〇〇三、二〇〇八）、北村（二〇一〇、二〇一四）らによる既存の研究に依拠しつつ、これまであまり説明されてこなかったクーデンホーフとファシズムの関係について検証することとしたい。

I 貴族としての使命、 大衆に対する不信

クーデンホーフは東京生まれであったが、幼いうちに家族とともにロンスベルクに移り、「回想録」の表現を借りていえば「真のヨーロッパ人」として、また、ハプスブル

ク君主国の貴族として教育を受けている（クーデンホーフ一九七〇d:三二）。父親のハインリヒは、光子に対して日本語の使用を禁じ、子どもたちがヨーロッパ文化のなかで育つよう配慮したという。光子は、夫の死後もその教育方針を堅持し、息子たちを貴族の子弟向け学校であるウイーンのテレジアヌムに通わせた。クーデンホーフは、一九一三年よりウイーン大学で歴史と哲学を学び始めるものの、その翌年には第一次世界大戦が勃発している。彼は健康上の理由により徴兵はされなかったが、他の同世代の若者と同様、後の思想には戦争の影響が強く刻み込まれることとなった。

その代表的な要素が、ヨーロッパに対する悲観主義である。シュペンゲラーの『西洋の没落』がベストセラーとなったことに象徴されているように、凄惨な戦争を体験したヨーロッパでは、将来に対する否定的な見方が支配的となる一方、左右を問わず急進的な変化を切望する感覚も強くなっていた。一九二二年にクーデンホーフが発表した小著『貴族』からは、当時の保守主義的な青年エリート層に共有されていた感覚をうかがい知ることができる（戸澤二〇〇三:三六二、クーデンホーフ一九七〇b:二九、RCK 1922: 25）。本書によれば、この時代は、封建時代に

おける剣による貴族政治と新しい時代における精神による貴族政治の中間にあり、前者は没落しつつあり、後者は生成されつつあるという。現状においては、事実上、金権政治が支配する望ましくない時代と位置づけられた。彼は、過去の封建時代のように血縁に基づく貴族ではなく、能力によって選ばれた者が新しい貴族として統治すべきと主張し、拝金主義にまみれた支配を排除すべきとした。こうした主張は、戦間期のドイツ語圏で台頭したいわゆる保守革命の潮流と共通する面があった。彼らは技術の進歩に対する支持、社会主義に対する反対といった面で価値観を共有していた。ただし、クーデンホーフにはナシヨナリズムの要素が希薄であった点に注意すべきであろう。

また、大衆に対する不信および民主主義に対する懐疑という要素も挙げられよう。クーデンホーフは、パン・ヨーロッパを民主主義的および半民主主義的（halbdemokratische）国家によって構成される地域とし（クーデンホーフ一九七〇a:六三、RCK 1923: 36）、パン・ヨーロッパ運動を大規模な大衆運動として展開させるべきと訴えていた。だが、彼は民主主義という言葉を多用しつつも、それを本当には信じていない節があった。クーデンホーフにとつて最も重要な価値はエリート主導を前提とする古典的自由主義であ

り、大衆に基盤を置く民主主義ではなかったといえる。この点を比較的明確に提示した著作として一九三七年の『自由と人生』が挙げられよう。彼によれば、イギリスのように君主政や貴族院といった非民主主義的な制度を有しているながら個人の自由が尊重されている国もあれば、ソ連やドイツのように、寛容ならざる多数派によって自由の権利がいったい制限されている国も存在した（クーデンホーフ一九七〇c:五八、RCK 1937: 54）。その点からすれば、自由主義と民主主義は常に両立するとは限らないのであり、両者が対立する場合は前者を優先すべきということになる。この点については、第III章以降でファシズムとの関係を考察する際に改めて触れることにしたい。

さらに、パン・ヨーロッパ同盟とその各国支部についても、エリート主体という組織の性格は終始変わらなかった。例えば、ドイツにおいてはパン・ヨーロッパ運動の支持者たちが半ば自発的に集まり、パン・ヨーロッパ同盟のドイツ支部を結成しようとしていたが、クーデンホーフはそれを上からコントロールし、大衆組織に発展させようとする動きにブレーキをかけた（Conze 2004: 25-30）。ウイーンの同盟本部と各国支部の関係についても、彼は本部に権限を集中させる形を採用し、各国支部の裁量拡大を要求す

るメンバーと激しく対立した。実際にクーデンホーフと接した会員のなかには、彼のワンマンぶりに反発し、パン・ヨーロッパ運動から去って行く者も多かったという。

II 「パン・ヨーロッパ」の世界観 ——一九二〇年代

一九二二年一月、クーデンホーフは「パン・ヨーロッパ——一つの提案」と題する論考を独逸両国の新聞に掲載し、ヨーロッパ統合に関わる構想を初めて公にした²⁾。彼は、第一次世界大戦の結果、世界は、大英帝国、アメリカ大陸、ロシア（ソ連）、東アジア、ヨーロッパの五つの地域に分かれたとの認識を示した（図1参照）。彼によれば、一九世紀はヨーロッパによる世界支配の時代であったが、二〇世紀初頭の大変動によって他の地域が台頭し、ヨーロッパ自身は第一次世界大戦によって力を失ったのであった。ポルトガルからポーランドにまたがるヨーロッパ大陸が一つの超国家（*Ueberstate*）にまとまらず、バラバラのままでは、ヨーロッパは没落の一途を辿るだろう。彼はこのように述べ、ヨーロッパ諸国の提携（*Zusammenschluß*）を訴えかけたのである。

られていたという点に注意が必要であろう。一九二三年の時点において、彼はロシアに社会主義体制が定着するかどうかは分からないとし、もし「白いロシア」が勝利したとしてもヨーロッパの利益にはならないと述べている（クーデンホーフ一九七〇a：八八、RCK 1923: 38-59）。この場合においても、ヨーロッパには「ロシア領ポーランドが過去一世紀間忍ばなければならなかった運命」がもたらされ、社会主義のみならず自由主義も蹂躪されるのであった。

一九三一年に出版された小著『スターリン社』（RCK 1931）では、第一次五カ年計画の成功について分析が行われている。クーデンホーフは、資本主義世界が大恐慌下で苦しんでいるのとは対照的にロシアが成功した理由は、社会主義そのものというよりは、国家資本主義（*Staatskapitalismus*）とも呼ぶべきスターリンの強圧的な体制にあると考えていた。「スターリン社」の題名が示すとおり、本書では、スターリン一人がロシア全体の運営を担い、ソヴィエト経済の最高責任者、共産主義という宗教の法王、ロシア皇帝という三つの役割を同時にこなしているとされた（RCK 1931: 56）。これに対しヨーロッパでは、国家単位の主権や経済に固執するあまり、アナキーとカオスが支配的となっている。現状を打破するためには、ロシアをモデルと

では、クーデンホーフはヨーロッパをどのような地域的単位として見ていたのだろうか？ ここでは、翌一九二三年に出版された『パン・ヨーロッパ』を中心に、彼の世界観について見ていくことにしよう。

クーデンホーフにとって、最大の脅威はロシア（彼はソ連のことを一貫してロシアと呼んでいた）であり、生涯にわたってその認識を変えなかった。彼によれば、ロシアはもともとヨーロッパに属していたが、ロシア革命によってヨーロッパの制度たる民主主義を拒絶したために、政治的にはヨーロッパから離脱したのであった（クーデンホーフ一九七〇a：四四―四五、RCK 1923: 1415）。つまり、ヨーロッパの東方国境は、かつてのようにウラル山脈ではなく、ロシアと民主的辺境諸国（*Randstaaten*）との政治的境界線に沿って引かれることとなった。

クーデンホーフは、いかなるヨーロッパの国家もこの新しいロシアに対して軍事的に対抗することはできないと述べ、ヨーロッパ政策の主要目的はロシア来襲の防止でなければならぬとした。これを防止する唯一の手段は、ヨーロッパの提携（*Zusammenschluß*）であった（クーデンホーフ一九七〇a：八三―八四、RCK 1923: 53-54）。また、彼の批判は社会主義だけではなく、ロシアそれ自体にも向け

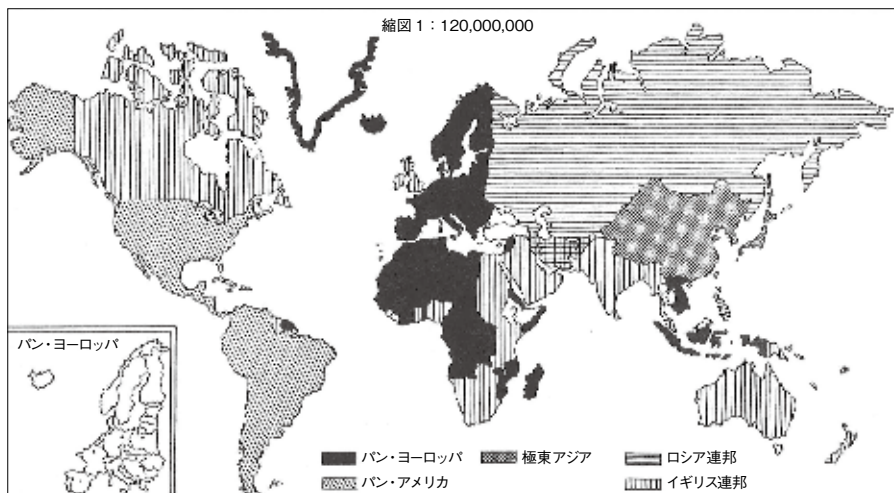


図1 世界におけるパン・ヨーロッパ
(出所) クーデンホーフ (1970a)。

しつつ、しかしながらロシアのような独裁や奴隷状態を回避する形でヨーロッパを自覚めさせねばならない (ROCK 1931: 25-30, 56; Ziegerhofer 2004: 378-381)。クーデンホーフは以上のように説明し、ヨーロッパの団結 (Einigkeit) を今一度主張した。

著作『パン・ヨーロッパ』においてロシアに次ぐ潜在的脅威とされたのはアメリカである (クーデンホーフ 一九七〇 a : 九四—一〇四、ROCK 1923: 67-80)。ただし、四八の州 (当時) が政治的・経済的に結合したアメリカ合衆国はヨーロッパが見習うべき重要なモデルとも見なされていた。フォードの自動車生産に象徴されるように、広大な経済領域と合理的分業を前提とするアメリカ経済は、ヨーロッパが分裂状態にとどまる限り、対抗不可能な相手であった。また、クーデンホーフは一八八九年より開催されているパン・アメリカ会議に言及し、第一次世界大戦以前にパン・ヨーロッパ連合が形成されていたならば戦争は生じなかったとする説に賛意を示している。

クーデンホーフは、一九二五年一〇月から翌年一月にかけて、「初のパン・ヨーロッパ公使」と称してアメリカ合衆国を訪問した (Ziegerhofer 2004: 128-131)。クーリッジ大統領との会見は実現しなかったものの、ケロッグ國務長

も、両国が協調する理由として挙げられた。彼の理解に基づけば、パン・ヨーロッパの移民が文化的使命を携えてイギリスの植民地に赴くことにより、人口のアンバランスが解消されるとともに、現地の文化も高度に発展する道が拓けるのであった。

ここで『パン・ヨーロッパ』に掲載された地図を再度確認してみよう (図1)。世界帝国として描かれるイギリスと並び、パン・ヨーロッパもまた、アフリカなどに広大な植民地を有する領域として示されている。クーデンホーフは、パン・ヨーロッパを「植民地開発共同体 (Die koloniale Arbeitsgemeinschaft Europas)」²⁾と位置づけるなど、植民地をパン・ヨーロッパに不可欠の要素として捉えていたが、こうした議論は決して特殊なものではなかった (北村二〇一二: 二二—二八)。むしろ、第二次世界大戦後からアフリカ諸国が相次いで独立する時期に至るまで、植民地の存在を前提としてヨーロッパ統合が議論されていた事実に注意が必要であろう。ヨーロッパとアフリカを一体と考えるいわゆるユーラフリカ概念に関しては、クーデンホーフの議論は先駆とでもいうべきものであった³⁾。

クーデンホーフは、植民地をヨーロッパ内部の対立を解消する手段としても捉えていた。一九二九年の論考におい

官、次期大統領のフーヴァー、カーネギー国際平和財団のバトラー理事長 (Nicolas Murray Butler) といった要人の接触には成功した。バトラーは、クーデンホーフが第二次世界大戦中にアメリカに亡命した際、さまざまな支援を提供した人物である。クーデンホーフは、雑誌『パン・ヨーロッパ』にて「アメリカ中がパン・ヨーロッパの理念に熱狂した」と訪問の成果を強調したが、米国亡命中に出版した著作では、多くのアメリカ人はパン・ヨーロッパに賛成していたものの、傍観的な立場に過ぎなかったと控えめな記述に変更している (ROCK 1943: 112)。

パン・ヨーロッパの地理的範囲に関して最も議論を呼んだのがイギリスの位置づけである。クーデンホーフによれば、イギリスは諸大陸にまたがる世界帝国であり、パン・ヨーロッパから除外すべき存在であった (クーデンホーフ 一九七〇 a : 七〇—八〇、ROCK 1923: 39-50)。ただし、パン・ヨーロッパとイギリスの関係は友好的なものでなければならぬ。また、イギリスの西部アフリカ植民地とパン・ヨーロッパが有する「同価値の」東部アフリカ植民地を交換するなど、領土交換による植民地経営の円滑化も提唱されている。パン・ヨーロッパが過剰人口を抱える一方、イギリスが余剰の移住候補地を有しているという点

で、彼は、植民地を持つ西欧諸国グループと植民地を持たない東欧諸国グループの対立に言及し、後者の「持たざる国」にもアフリカの開発に参加させるべきと述べた (北村二〇一二: 二四)。つまり、植民地を有しながらも人員が不足しているフランスがドイツの労働力を確保する一方、ドイツも植民地の恩恵に浴するという一石二鳥の解決法である。

ここまで、ロシア・アメリカ・イギリス・植民地の順でパン・ヨーロッパと外部世界との関係について見てきたが、パン・ヨーロッパとしてのまとまりを生み出すためには、内部における対立を解決する必要がある。いうまでもなく、そのなかで最も重要であったのが独仏関係である。

第一次世界大戦後に成立したいわゆるヴェルサイユ体制においては、フランスをはじめとする戦勝国により、敗戦国ドイツの弱体化とその維持が意図されていた。莫大な額の賠償金がドイツに課され、オーストリアとの合邦 (アンシュルス) が禁止されるなど、ドイツ国家の領域についてもさまざまな形の制限が加えられた。それに伴う混乱が収束したのは一九二四年頃であり、ヨーロッパはそこからようやく「相対的安定期」と呼ばれる時代を迎えた。ロカルノ条約によって対フランスを中心とするドイツの西方国境が安定したのは二五年、ドイツが国際連盟への加盟を果た

したのは翌二六年である。クーデンホーフのパン・ヨーロッパは、戦後直後の混乱期に提示されたことで人々の注目を集め、この安定期において、順調に運動を進展させていくことに成功した。本稿の冒頭でも述べたように、二九年九月には、ブリアン仏首相が国際連盟総会において「ヨーロッパ連邦的な秩序」の樹立を提案し、クーデンホーフの活動も頂点へと達した。

ところが、独仏協調の象徴的な存在であったシュトレゼマン独外相が二九年一〇月初めに急逝、その三週間後にはニューヨーク証券取引所で株価が大暴落し、大恐慌の発端となった。翌三〇年五月にはいわゆるブリアン覚書が提出されるものの、独仏が協調してパン・ヨーロッパに邁進するという状況ではなくなってしまう。では、クーデンホーフは、この危機に対してどのように対応しようとしたのだろうか。以下、その点について見ていくことにしよう。

Ⅲ ファシズムとの連携——一九三〇年代

クーデンホーフは、状況が悪化していくなかで窮余の策としてムッソリーニに接近したわけではない。むしろ、彼

はかなり早い時期からイタリア・ファシズムを好意的に見ていたものと思われる。ムッソリーニがいわゆるローマ進軍によって政権を獲得した一九二二年一〇月の翌月、クーデンホーフはパン・ヨーロッパ構想を初めて公にする一方、翌二三年二月にはムッソリーニに対してパン・ヨーロッパ運動を率いるよう要請し、その書簡をウィーンの『新自由新聞』で公表している。^{*4}

「ヨーロッパをお救いください」との文言から始まるこの書簡では、イタリアこそがヨーロッパの治癒(Heilung)、統一(Einigung)、再生(Erneuerung)を実現できると書かれ、パン・ヨーロッパ会議をローマで開催することが要請されている。クーデンホーフによれば、中世のカロリング朝から派生した独仏伊のヨーロッパ三大国民のうち、独仏が千年にわたって相争っているため、ヨーロッパを社会主義の脅威から救い、ヨーロッパ合衆国の基礎を築くことができるのはイタリアしかなかった。

だが、この書簡に対するムッソリーニからの返答はなかった。同年に出版された『パン・ヨーロッパ』では、ムッソリーニへの直接的なメッセージは含められておらず、イタリアがパン・ヨーロッパ会議を招集する可能性について言及されただけである(クーデンホーフ一九七〇

a. 一六四、RCK 1923:151)。

ファシズムを肯定的に評価していたのはクーデンホーフだけではなかった。イタリアだけでなくフランスやドイツにおいても議会では政党が乱立気味となり、スペインやポルトガル、ポーランドといった諸国ではすでに一九二〇年代の段階で権威主義的な体制が誕生した。歴史家のマゾーアが指摘するように、戦間期のヨーロッパにおいては依然として民主主義に対する否定的なイメージが存在した(Mazower 2000: 16-17, 22-23, 27)。各国のナシヨナリストたちは、民主主義を「ブルジョア的」であり、非効率的であり、実利主義的であり、フロクコートとシルクハットを身につけた古い世代が主張するもの、と見ていた。こうした感覚は、一九二九年の大恐慌を迎えるといっそう強化されるようになる。危機を解決するためには、何も決められない議会ではなく、強いリーダーシップと規律が必要とされたのである。ムッソリーニだけでなく、一九三三年に政権を握ったドイツのヒトラーについて、自国以外でも一定程度の支持が存在した背景には、こうした点があった。

例えば、第二次世界大戦後にソ連に対する「封じ込め」論で有名となったジョージ・ケナンは、米国の若き外交官として活躍していた当時、「慈悲深き専制政治」たるファ

シズムは民主主義よりも多くの可能性を有しており、米国のもまた「憲法改正によって権威主義的国家へと至る道」を検討すべきだと述べている。『タイムマシン』などのSF小説で知られ、社会主義を支持していたH・G・ウェルズもまた、オックスフォードの学生に対し、集団主義的な時代に対応するためには、「リベラル・ファシスト」あるいは「見識あるナチス」になるべきだと呼びかけている。

ただし、クーデンホーフ自身はナチズムに対して明確に反対の立場を取っていた。その直接的な理由は、ナチズムの人種主義であった。ヒトラーは、パン・ヨーロッパを「劣等、もしくは人種が混ざった私生児どもの理念」と批判するだけでなく、ボヘミア貴族と日本人の子どもであるクーデンホーフを人種混淆の典型であり、「正真正銘の私生児(Allerweitsbastard)」と罵倒した。^{*5} また、ナチスの掲げる反ユダヤ主義は、ユダヤ人を妻とするクーデンホーフにとっては許しがたいものであった。貴族としてコスモポリタンな行動様式を身につけ、偏狭なナシヨナリズムから一定の距離を保っていた彼は、当初よりヒトラーやナチズムに嫌悪感を持っていたようである(Niegerhofer 2004: 407-408)。しかしながら、クーデンホーフはナチスが政権を獲得したからといってすぐにドイツをパン・ヨーロッパ

運動から排除したわけではない。彼によれば、ドイツを政治的に孤立させるのではなく、ドイツをヨーロッパのなかに組み込み、より攻撃的でない方向に導くことが肝要であった。彼がナチス・ドイツとの妥協が不可能であることを最終的に悟ったのは、一九三七年、パン・ヨーロッパ同盟ドイツ支部の資産が当局に没収されたときであったともいわれている (Ziegerhofer 2004: 413)。

とはいえ、ナチスの台頭によって状況が大きく変わった以上、パン・ヨーロッパ運動もこれまでのように独仏の協調を核とする路線では立ちゆかなくなった。そこでクーデンホーフは、ドナウ連合構想を運動の基礎に据えた。これは、大恐慌の影響が顕著に表れていたドナウ河流域の農業諸国と大国である独伊との経済共同体を形成し、そこにフランスなどの他の諸国も引き入れて将来のパン・ヨーロッパに つなげようとする構想であった (戸澤二〇〇三: 三六六―三六七)。当初よりウィーンに活動の本拠を置いていた彼は、三四年にオーストロ・ファシズムと呼ばれる独裁体制を敷いたドルフスに接近し、オーストリアとの関係をいっそう密にしていた。パン・ヨーロッパ同盟の本部は、二〇年代から引き続き元王宮であるホーフブルク宮殿に置かれ、ドルフスおよび後継のシシュニクは、パン・

排斥する。それは資本主義的経済制度と、欧州文明とを基幹として、ボルシェヴィズムの影響をも離れ、階級闘争に毒せられた議会制度の不安定な均衡にも依らずして、強き伊太利の建設を目的とする」(クーデンホーフ一九七〇c: 一〇〇―一〇一、RCK 1937: 106)。

クーデンホーフは、一九二三年にムツソリーニに宛てた公開書簡と同様、社会主義に対する防波堤としてファシズムを見ていた。それによれば、ムツソリーニはボルシェヴィズムの病毒からイタリアを守るために、逆説的ながらボルシェヴィズム的薬劑をイタリアに処方したという。すなわち、反議会主義・反自由主義・テロル・警察支配・個人の自由の制限・露骨なプロパガンダ・反対および批判の禁止・一党支配・独裁、といった要素である。その点からすれば、イタリアもロシアやドイツと同じように全体主義的であったが、相対的には自由を維持しているのであった。

クーデンホーフにとって、イタリアとナチス・ドイツを分かち最大のポイントとは人種主義であった。問題とされたのは、アーリア人種だけが人類をアナーキーと混乱とボルシェヴィズムの渦中から救済しうると信じ、ユダヤ人を敵として排除する姿勢である。ただし彼は、ナチスがアーリ

ヨーロッパ同盟の名誉会長にも就任している。だが、ドナウ連合を成功させるためには、ドイツを引き入れるにせよ、それに対抗するにせよ、別の強力な大国を味方に引き入れる必要があった。それがイタリアである。

IV クーデンホーフとファシズム

クーデンホーフがファシズムをどう見ていたかを検討する上で重要なのは、一九三七年に『全体的国家・全体的人間』のタイトルで独語版が出版され、三八年に英語および仏語版が出された著作である。興味深いことに本書は、第二次世界大戦後に首相となる鳩山一郎によって邦訳され、『自由と人生』というタイトルで一九五三年に出版されている⁶。日本では、この書物は全体主義に対する自由主義の戦いといったイメージで捉えられているが、イタリアのファシズムについてはむしろ肯定的な評価がなされている。以下、その点について詳しく見ていくことにしよう。

「ファシズムはボルシェヴィズムの如き一階級の独裁をも、国民社会主義の如き一人種の専制をも、ともにア人種の世界的使命を放棄し、西洋文化の枠に収まるファシズム国家に移行するのであれば、ドイツにおける自由の観念は大幅に進歩するだろうとも述べている (クーデンホーフ一九七〇c: 一〇一、RCK 1937: 107)。

では、議会民主主義はボルシェヴィズムの防波堤にはならないのだろうか？ クーデンホーフは、この体制はすべての国において適合するわけではないと主張する (クーデンホーフ一九七〇c: 五八―六七、RCK 1937: 54-55)。議会制度の本家本元であるイギリスでは、ジェントルマンによる騎士道が定着しており、政治家や政党はフェア・プレイの精神でお互いに対峙している。だが、ドイツにおいては、公正なる勝負の法則が理解されておらず、議会の機能を麻痺させて選挙民の信用を失い、独裁主義政党の台頭を許してしまった。そもそも、階級闘争の激化によって議会による意思決定はますます難しくなっている。クーデンホーフはこのように述べ、議会民主主義は高い道徳的水準を要するのであり、すべての国家がそれを担えるわけではないとした。

その点からすれば、ムツソリーニが議会民主主義とは異なるシステムをもって、すなわち「組合国家 (Korporativer [sic] Staatsaufbau)」をもってファシスト党の独裁を実施

しようとしたことは、まったく正しい選択であったという(クーデンホーフ一九七〇:一〇二—一〇七、RCK 193f: 107-116)。組合国家の議会は、イデオロギーではなく職能を単位として構成され、国家的な課題は素人や官僚ではなく、専門家によって判断されるようになる。これにより、労働者による多数派が議会を通して革命を実行する危険が消滅し、議会の不安定極まる均衡は、組合国家の安定した均衡によって置き換えられた。クーデンホーフは、こうした組合国家を、全体主義の表れではなく、むしろ新しい方法によって全体主義の弊害を除去しようとする試みと位置づけていた。オーストリアについても同様であった。彼によれば、オーストリアのナチ党がドイツの支援を受けて選挙に多大な影響を及ぼし、同国の独立と宗教的自由を喪失させようとしていたのである。その際、ドルフス首相は議会民主主義を廃し、職能別の単位を基本とする身分制国家(Ländestaat)を樹立したが、それはドイツの全体主義を排除するためだったと説明されている。

以上が『自由と人生』の概要であるが、注意すべきは、これが一九三七年に書かれた点であろう。クーデンホーフは、ナチズムを批判するなか、イタリア・ファシズムに期待を抱き続けていたが、独伊両国の接近は次第に明確なも

引き入れるべく尽力したのであった。ムツソリーニは当初、パン・ヨーロッパに対して批判的であり、『反ヨーロッパ』という雑誌を発行して毎号のようにブリアンとクーデンホーフを攻撃していたという。だが、とクーデンホーフは続ける。ムツソリーニとてパン・ヨーロッパを支持するイタリア世論に抗し続けることはできなかった。それまでパン・ヨーロッパ会議に欠席していたイタリアは、一九三二年にバーゼルで開催された回より参加するようになった。ヒトラーが政権を獲得した直後の三三年五月、クーデンホーフがムツソリーニに謁見した際には、彼は反ナチスであることを明言し、反ユダヤ主義をまったくのナチセンスと表明したという。

『汎ヨーロッパ十字軍』によれば、クーデンホーフが次にムツソリーニに謁見したのは一九三六年五月である。このとき、二人は旧知の友人のように親しく語り合い、内外の情勢について率直に議論したという。その際、ムツソリーニはクーデンホーフに対し、パリに赴いてフランスとの同盟の可能性について探りを入れるよう依頼した。だが、この時期のフランスでは、左派による対ファシズムの人民戦線内閣が成立しようとしていたところであり、イタリアとの連携は困難であった。クーデンホーフは、絶望的

のとなりつつあった。翌三八年三月、ドイツとオーストリアの合邦(アンシュルス)により、パン・ヨーロッパ同盟の本部がナチスによって占拠されると、クーデンホーフはスイスへと逃れた。これ以降、彼はスイスとフランスの双方で事態を打開すべく活動したが、『自由と人生』の英語版とフランス語版を三八年に出版した背景には、英仏に対してイタリアの重要性を説くためであったとも考えられる。だが、彼の試みは失敗に終わった。四〇年六月にフランスがドイツに降伏した後、パン・ヨーロッパ運動そのものの継続が困難となり、クーデンホーフはアメリカへと渡っている。

第二次世界大戦中の一九四三年、クーデンホーフは最初の自伝となる『汎ヨーロッパ十字軍』をニューヨークで出版した。ここではファシズムそのものに対する明確な賛否の表明は控えられているものの、チェコスロヴァキア初代大統領のT・G・マサリクと並んでムツソリーニに独立した一章が割かれている(クーデンホーフ一九六六:下三一—四三、RCK 1943: 169-176)。本書によれば、ヒトラーの政権獲得により、フランスとイタリアが中心となってドイツに立ち向かう必要が生じたのであり、そうしたなか、クーデンホーフもムツソリーニをパン・ヨーロッパ運動に

な状況を理解しつつパリに赴き、再びローマに戻ってムツソリーニに見込みがないことを伝えた。その後、クーデンホーフがムツソリーニに謁見することはなかったという。ただし、四〇年五月、すなわちドイツがフランスへの侵攻を始める段階において、クーデンホーフは仏外務省の許可を得た上でムツソリーニに長文の書簡を送ったとしている(クーデンホーフ一九六六:下九九、RCK 1943: 212)。イタリアに「文明的ヨーロッパ(civilized Europe)」の側に立つよう要請するためであった。なお、これと同時に、チャーチルもイタリアの参戦を阻止すべくムツソリーニに書簡を送っている点に留意すべきだろう(チャーチル一九四九—五五:第五卷一八七—一九三)。このときのクーデンホーフの行動は、連合国側において問題視されるようなものではなかった。

以上より明らかのように、一九三七—三八年にヨーロッパで刊行された『自由と人生』と一九四三年にアメリカで発表された『汎ヨーロッパ十字軍』との間には、イタリアの位置づけに関して明確な相違点が存在する。前者においては、ファシズムに対して肯定的な評価がなされ、パン・ヨーロッパ運動におけるイタリアへの期待感が示されているのに対し、後者においては、ナチスの政権獲得という大

おわりに

クーデンホーフの評価が難しい理由の一つは、彼が多作であっただけでなく、書いた時期によって相互に矛盾する記述が見られるという点にある。自伝に關しても、クーデンホーフは人生の節目に新しい章を書き足していき、最後に完成版を仕上げると主張していたが、合計五点に及ぶ自伝的著作は、ヴァージョンが代わるたびに章が増えていくというよりは、そのときの状況に応じて自らの歴史を塗り替えていくプロセスを反映していた。ファシズムについての記述の変化はその典型的な例であろう。

クーデンホーフのコンパクトな評伝を執筆した歴史家のコンツェは、彼をヨーロッパ統合史における「最も重要な先駆者の一人」として位置づけつつも、自信過剰・傲慢・尊大といった性格的な問題点も指摘している (Conze 2004: 101-103)。恐らくこの性格のおかげで、彼は一人の私人でありながらもヨーロッパ各国の政財界にアプローチし、パン・ヨーロッパ運動を大規模に展開していくことができたのだらう。だが、ときに強引ともいえる行動様式により、

きな変化のなかで、「やむなく」イタリアに接近したというニュアンスが感じられる。立ち位置のこうした変化は、アメリカを舞台としてパン・ヨーロッパ運動を継続するための一種の戦略であったとも考えられる。だが、すでに見てきたように、クーデンホーフはナチスが政権を獲得した三年一月以降にムツソリーニに接近し始めたわけではない。例えば、彼は一九三〇年三月、すなわち、ブリアン覚書が公表される二カ月前の段階において、雑誌『パン・ヨーロッパ』で三年のムツソリーニ宛公開書簡の全文を再掲載し、イタリアに対してパン・ヨーロッパ運動のファシズム・セクションを担うべきだと主張した。この時点においては、いち早くムツソリーニに注目し公開書簡を送ったクーデンホーフの「先見の明」が強調されている。興味深いことに、この公開書簡は四三年の『汎ヨーロッパ十字軍』にも掲載されているが、ここでは、二〇年代初頭の段階でムツソリーニが「究極の帝国主義者 (arch imperialist)」になるとは誰にも分からなかったという点が強調されている (クーデンホーフ 一九六六: 上二〇九—一一三、RCK 1943: 78-80)。

仲間とすべき人間を敵に回してしまったことも事実である。特に、第二次世界大戦後は、多くの統合運動が登場し、パン・ヨーロッパはそのなかの一つとなったが、クーデンホーフは自分が先頭に立てないことに苛立ち、その焦りがいつそうの孤立を招く悪循環に陥ってしまった。

だが、クーデンホーフの問題点を挙げつらうことは本稿の目的ではない。より重要なことは、彼がなぜヨーロッパ統合史の「主流」から外れてしまったのかという点である。本稿でも触れたように、彼がファシズムに接近したというのは主要な理由の一つであろう。しかしながら、これもまた本稿で触れたように、戦間期においてファシズムに惹かれたのはクーデンホーフだけではない。第一次世界大戦後のヨーロッパでは、多くの国で民主化が進展し、民族自決によってチェコスロヴァキアやポーランドなどの新しい国民国家も誕生した。しかしながら、民主主義は必ずしも政治の安定をもたらしたわけではなかったし、民主主義に対する人々の信頼度も今から想像されるほど高いものではなかった。既述のように、クーデンホーフはジェントルマンを有するイギリスのような国でなければ議会民主主義を使いこなせないと見ていたが、これは、チャーチルのようなイギリスのエリート層にも見られた考え方であった

(Mazower 2000: 16-17)。そうしたなか、一方の極にはソ連の社会主義という回答が提示され、それに賛同しない者に対しては、イタリアのファシズムという回答が提示されているように見えた。大恐慌以降の危機の時代には、ドイツのナチズムという選択肢も登場した。民主主義そのものの廃棄には至らないにせよ、チェコスロヴァキアのように、強いリーダーシップと効率の良い意思決定を実現すべく新しい形の民主主義が模索されたケースも存在した。

また、本稿の射程を超える論点ではあるが、鳩山一郎が第二次世界大戦後に『自由と人生』を読んで感銘を受け、翻訳を出版したという点にも注意すべきであろう。現在ではハト派のイメージが強い政治家であるが、彼がファシズムに対して好意的な評価を含む同書に惹かれたという事実は、日本における戦前と戦後の連続性を考える上で示唆的である。チャーチルもまた、戦後に執筆した回顧録において、ムツソリーニをボルシェヴィズムからイタリアを守った政治家として評価している (チャーチル 一九四九—五五: 第一七卷七九—八〇)。ここでは、一九四〇年六月にイタリアが英仏に宣戦するという「致命的なミス」を犯した後においても、イタリアには連合国側に戻ってくる選択肢が存在したし、連合国もそれを歓迎したであろうと書か

れている。以上の点を考えると、クーデンホーフのファシズムに対する関係を単純に逸脱として見なすことはできないだろう。

しかしながら、仮に戦前のクーデンホーフがそれほど逸脱した存在でなかったとすると、彼はなぜ戦後のヨーロッパ統合において主導権を握れなかったのだろうか。彼は決して不器用な人間ではなかったはずである。第二次世界大戦中にアメリカに亡命した彼は連合国側の論理で活動し、戦後にヨーロッパに戻った後は、チャーチル、後にはドゴールなど、その時々々の主要人物に接近し、少しでも有利な立場を獲得しようとした。しかも、戦前から戦後にかけて活躍したエリート層においては、クーデンホーフのように時代の変化に合わせて自らの立ち位置を変え、何らかの形で「転向」を果たした人物が少なからず存在した。とすれば、彼は某かの絶対的な規準から逸脱したというのではなく、規準そのものの揺らぎをどこかの時点で読み誤ったということになるのだろう。

現在の「EU規準」から見れば、クーデンホーフは「ヨーロッパ統合の父」と評するにはやや問題のある人物と見えるかもしれない。だが、自由民主主義を前提とする「EU規準」は戦後の統合が進展する過程で形成されてき

(Hilfers *Zweites Buch: Ein Dokument aus dem Jahr 1928*, Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt, 1961, pp.129-31)。

* 6 クーデンホーフ (一九七〇c) (RCK 1937) にひびくは、基本的には邦語版から引用を行っているが、武士道を騎士道 (Ritterlichkeit) に、国家社会主義を国民社会主義 (Nationalsozialismus) に修正するなど、独語版に基づいて修正した箇所もある。

* 7 RCK, "Anteuropa," *Panuropa* 6: 3, March, 1930, pp.91-95. なお、ムンツリーニはパン・ヨーロッパ運動について『新自由新聞』紙上で反対意見を表明している。Benito Mussolini, "Ist Panuropa möglich?: Die Ueberprüfung der Friedensverträge als erstes Erfordernis," *Neue Freie Presse*, July 3, 1930, pp.2-3.

* 8 邦訳においては、arch imperialist は「反帝国主義者」と誤訳されている。クーデンホーフ (一九六六) 上巻、一一〇頁。誤訳されている。クーデンホーフの五つの自伝とは、RCK 1943 (邦訳: クーデンホーフ 一九六六)、RCK 1949^a RCK 1953^a RCK 1958 (邦訳: クーデンホーフ 一九七〇c)、RCK 1966^b がある。なお、クーデンホーフ (一九六六) は、当初『全集』に収められる予定であったが、クーデンホーフ本人の要望により中止されている。

* 10 中田瑞穂 (二〇一三) 『農民と労働者の民主主義——戦間期チエコスロヴァキア政治史』名古屋大学出版会。

たものである。こうした「EU規準」の形成過程を考える上でも、クーデンホーフの軌跡を辿ることは重要だといえるだろう。本稿においては、主として戦間期に的を絞って彼の歩みを見てきたが、アメリカ亡命中や戦後の動きについてはまだまだ知られていないことが多い。その点の解明については他日を期すことにしたい。

●注

- * 1 例として、シュミット村木真寿美 (二〇〇九) 『ミッコと七人の子供たち』河出文庫、木村毅 (一九八六) 『クーデンホーフ光子伝』鹿島出版会。
- * 2 クーデンホーフ「パン・ヨーロッパ——一つの提案」(遠藤 二〇〇八: 九二—一〇〇) (Richard Coudenhove-Kalergi (hereinafter referred as RCK), "Panuropa: Ein Vorschlag," *Neue Freie Presse*, November 17, 1922, pp.2-3)。
- * 3 ユーラフリカ概念に関しては、黒田友哉「ヨーロッパ統合の裏側で——脱植民地化のなかのユーラフリック構想」(遠藤・板橋 二〇一三: 一七—一七五七)、平野千果子 (二〇〇九) 「交錯するフランス領アフリカとヨーロッパ——ユーラフリカ概念を中心に」『思想』一〇二二号、一七八—一九九頁。
- * 4 RCK, "Offener Brief an Benito Mussolini," *Neue Freie Presse*, February 21, 1923, p.2.
- * 5 アドルフ・ヒトラー (二〇〇四) 『続・わが闘争——生存圏と領土問題』平野一郎訳、角川文庫、一七八—一八二頁

●参考文献

- 遠藤乾編 (二〇〇八) 『原典ヨーロッパ統合史——史料と解説』名古屋大学出版会。
- 遠藤乾編 (二〇一四) 『ヨーロッパ統合史 (増補版)』名古屋大学出版会。
- 遠藤乾・板橋拓己編 (二〇一三) 『複数のヨーロッパ——欧州統合史のフロンティア』北海道大学出版会。
- 北村厚 (二〇一三) 『「パン・ヨーロッパ」論におけるアフリカ・アジア』『現代史研究』五七号、二二—三六頁。
- 北村厚 (二〇一四) 『ヴァイマル共和国のヨーロッパ統合構想——中欧から拡大する道』シネルヴァ書房。
- リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー (以下クーデンホーフ) (一九六六) 『汎ヨーロッパ十字軍』深津栄一訳、鹿島研究所出版会、二巻組 (原著は RCK 1943)。
- クーデンホーフ (一九七〇a) 『パン・ヨーロッパ』鹿島守之助訳『クーデンホーフ・カレルギー全集』(全九巻) 鹿島研究所出版会 (以下『全集』) 一巻、一一—一八八頁 (原著は RCK 1923)。
- クーデンホーフ (一九七〇b) 『貴族』鹿島守之助訳『全集』三巻、一一—五〇頁 (原著は RCK 1922)。
- クーデンホーフ (一九七〇c) 『自由と人生』鳩山一郎訳『全集』六巻、一一—一四四頁 (原著は RCK 1937, ただし邦語版は英語版 RCK 1938 からの翻訳である)。
- クーデンホーフ (一九七〇d) 『回想録——思想はヨーロッパを征服する』鹿島守之助訳『全集』七巻、一一—三三頁 (原著は RCK 1958)。

- ウインストン・チャーチル(一九四九—五五)『第二次大戦回顧録』(全二五巻)毎日新聞翻訳委員会訳、毎日新聞社。
- 戸澤英典(二〇〇三)『パン・ヨーロッパ運動の憲法体制構想』『阪大法学』五三巻三・四号、三五七—三九一頁。
- 戸澤英典(二〇〇八)『戦間期ヨーロッパの『和解』と『寛容』——パン・ヨーロッパ運動とその影響を中心に』田中孝彦・青木人志編『戦争のあとに——ヨーロッパの和解と寛容』勁草書房、三一—五四頁。
- 林信吾(二〇〇九)『青山栄次郎伝——EUの礎を築いた男』角川書店。
- アレック・ヒーター(一九九四)『統一ヨーロッパへの道——シャルルマーニュからEC統合へ』田中俊郎監訳、岩波書店。
- 福田宏(二〇一四)『ポスト・ハプスブルク期における国民国家と広域論』池田嘉郎編『第一次世界大戦と帝国の遺産』山川出版社、一〇六—一三四頁。
- 牧野雅彦(二〇一一)『ロカール条約——シエントレーゼンとヨーロッパの再建』中公叢書。
- Conze, Vanessa (2004) *Richard Condanhove-Kalergi: Unspritener Visionär Europas*, Zürich: Muster-Schmidt Verlag.
- Mazower, Mark (2000) *Dark Continent: Europe's Twentieth Century*, New York: Vintage Books.
- RCK (= Richard Coudenhove-Kalergi) (1922) *Adel*, Leipzig: Verlag der Neue Geist.
- RCK (1923) *Pan-Europa*, Wien: Pan-Europa Verlag.

- RCK (1931) *Stalin & Co.*, Leipzig/ Wien: Pan-Europa Verlag.
- RCK (1937) *Totaler Staat—Totaler Mensch*, Glarus: Paneuropa-Verlag A. G.
- RCK (1938) *The Totalitarian State against Man*, Glarus: Paneuropa-Verlag A. G.
- RCK (1943) *Crusade for Pan-Europe: Autobiography of a Man and a Movement*, New York: G. P. Putnam's Sons.
- RCK (1949) *Der Kampf um Europa: Aus meinem Leben*, Wien: Humboldt.
- RCK (1953) *An Idea Conquers the World*, London: Hutchinson.
- RCK (1958) *Eine Idee erobert Europa*, Wien/ München/ Basel: Kurt Desch.
- RCK (1966) *Ein Leben für Europa: Meine Lebenserinnerungen*, Köln: Kiepenheuer & Witsch.
- Ziegerhofer-Prettenhaler, Anita (2004), *Botschafter Europas: Richard Nikolaus Coudenhove-Kalergi und die Paneuropa-Bewegung in den zwanziger und dreißiger Jahren*, Wien/ Köln/ Weimar: Böhlau.

●著者紹介
一五頁に掲載。